

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 りょう えいはつ 廖 栄発

本論文は、平安時代前期の漢文学の中で、「私」がいかに詠出されるに至るか、その過程を三人の詩人の作品を精読することによって描き出すことを企図している。

序章は、白居易の「公私」のあり方と、白詩に影響を受けた日本漢詩のそれとを比較して、論文全体の大筋を表す。白居易は、「公」的な詩、即ち皇帝以下天下万民のために政治を批判する「諷諭詩」を制作する一方、公務の余暇を過ごす「私」を歌う「閑適詩」、また友人たちと自由に交わる「私」を述べる「感傷詩」を別に立てている。初期の日本漢詩は、大半が宮廷での「君臣和楽」を演出する詩作であった。嵯峨朝では「文章経国」の理念のもと、唯美的な詩が行われるが、「公」的な性格を強く帯びる点是不変。「文章経国」の理念が退潮し、詩人無用論が高まり、白詩の受容が広まると、ようやく「私」の領域が見出される。しかしそれは、「詩臣」として天子の恩沢を歌う、という形で自らの「志」を述べる、「公」「私」の両義を兼ねたあり方が中心で、菅原道真失脚後は、「個の詩言志」に閉じこもる方向に向かわざるを得なかった。以上の見通しが、以下の三部で確かめられる。

第一部は島田忠臣の詩を扱う。忠臣は「詩臣」意識を持ち、「個」の境遇や内面を応制詩に詠ずる。不遇だった忠臣は、官職にありながら隠者のように落ち着いた「大隠」の境地を標榜し、白居易のような「閑適」を味わおうとする。また白居易の、元稹や劉禹錫との「交友」に倣い、互いの不遇や孤独を詩友と分かち合う詩も制作する。哀傷詩においても白居易に傾倒して知音の早世を悼む詩を作る。ただしそこには和歌的な発想も交えている。

第二部は菅原道真について。道真は家の学として修辭の彫琢に務めた。讃岐守へ転出して、道真は白居易の「諷諭詩」的な社会に材を取った詩を制作する。ただし道真は不遇感が強く、そうした詩も、表現はむしろ白居易左遷中の「感傷詩」に近い。国守でありながら「客意」を持つのは独特なあり方である。「寒早十首」は「諷諭詩」として純化しているが、その「次韻式連作」形式は、元稹が流謫中に孤独に自分の詩に次韻したことに始まっていて、やはり不遇感と結びついている。道真は帰京後、宇多天皇のもと「諫臣」として活動するようになるが、その政治志向は、脱政治的風流志向とも表裏するものであった。

第三部では「延喜以後詩序」に、公宴での作詩よりも「私」の領域での「言志」を重視すると述べた紀長谷雄が、実作においてどのような表現を行ったかを確かめる。

本論文は、日本漢文学において「私」の表現がいかに根付くかを検証することで、日本的な「公私」の観念の解明にも資するものである。作品の読解は確実で、従来の解釈や誤字・錯簡の訂正を行った箇所も多い。三人の詩人によって「軌跡」を描き出すことに努めた反面として、それぞれの詩人については論じ残された部分も大きい。審査委員会は、上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に値するとの結論に至った。